

一冊の本が人生を変える



先月末をもって「花子とアン」のテレビ番組が終わりました。最高視聴率が25%までいったことに反映されているように、人々の関心も高かった。「ごきげんよう さようなら」——美輪明宏の情感こもったあいさつも視聴者の心に染みいったのかもしれませんが。



テレビ、ミュージカルとビジュアルな楽しみも、それを可能にする原作があってこそ。原点に戻り、本との出会いがいかにか大切か。関東大震災、最愛の息子の死、太平洋戦争に遭遇し、いくつもの“曲がり角”にぶつかった花子が言っています。「一冊の本が心の支えとなって・・・」

『赤毛のアン』出版100周年の取材でカナダのプリンスエドワード島を訪れた際に、島をめぐる旅のなかで「九州からやって来た」という車椅子の日本婦人に会いました。名前をKさんと言っていました。

宮崎空港から羽田へ、そして成田からトロントの空港を経由して60人乗りほどの小型機で州都シャーロットタウンに降り立った。60歳、還暦の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪いので、娘の一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行とのことでした。



グリーンダイブルズ

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、みんな障害者にとっても親切で感動しました。アンは40年前に村岡さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンスエドワード島は、牧歌的な美しい光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」

身障者にとって「旅は最高のリハビリ」とも言われています。不自由な肉体を動かすことに伴う体力の自信回復と同時に、心の刺激とときめきも得られるからです。

夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。こうしてKさんは40年来の夢をかなえた。その支えとなったのがアンの前向きな生き方でした。一つの小説が一人の人間に生きる力と希望を与えた一例です。一冊の本が、その主人公が、読者を苦難から立ち上がらせる力をも持っていることに私も改めて感動したのでした。

このKさんのように、村岡花子が「日本の子供たちに夢を送りたい」と命をかけて翻訳した作品に、終戦直後から現在まで、どれだけ多くの少女たちが、また男性も大人も勇気づけられてきたことでしょうか——



島の牧草畑

話は文学からスポーツの世界に飛びますが、昨年の東京オリンピックの招致プレゼンテーションの際、片足がないという不遇のなか、さわやかな呼びかけで話題となった佐藤真海さんのことが思い出されてきます。彼女は出身大学の「早稲田学報」8月号で次のように語っています。



「招致プレゼンでは感謝の気持ちをいっぱいこめて話しました。大学生生活の一番楽しい時期に、突然、骨肉腫が発病してしまった。話が急展開過ぎて心の準備ができていませんでした。がんセンターに行った後でも、半ば嘘だと疑っていたんです。・・・一瞬で様々なことが頭に浮かびました。

『19年間とはいえ、これまでの人生に悔いはないよな』とか『足を失ってまで、私は生きていく価値があるのかな』とか。・・・退院して社会人に

なった後も、最初のパラリンピックに出場した後も、ときどき泣きたくなるような喪失感に襲われることがありました。でも『大会の舞台に立つんだ』という大きな夢があったから、明日も頑張ろうという気持ちで、がむしゃらに練習できたんだと思います」



佐藤さんの体験は、アンと同じく、そしてKさんと同じように「未来に夢を持つこと」の大切さを伝えてくれています。

首都シャーロットタウンからキャベンディッシュ（アボンリー村）への道は、なだらかな上り坂と下り坂、曲がり道の連続でした。順調に見える人生も、途上で何が起こるか分からない。人生の岐路で、思いがけない障害に直面することもある。そのときに、アンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いて行ってほしい——これこそ著者モンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージでないかと思うのです。